

# 伝統技術の海外ニーズ

● 放眼日中 ●

表具師、という仕事があることは知っていたが、具合的にどんなことをしているのかは、ほとんど知らなかった。先日、偶然にも友人の実家で戦前から続く表具屋さんを訪ね、その仕事内容と現状を聞く機会を得た。

表具というとは、掛け軸やびょうぶなどの芸術品を思い出すだけで知識は全くなかったが、「紙に関することとなら何でもやるんです」との説明は少し意外だった。ふすまや障子の製作など、これまでは日常的にさまざまな仕事があったのだ。全盛期には組合加盟者も多く大いに繁栄していたが、昨今はすべてが現代化してしまい、ふすまのある家も減り、絵画や書画の軸を新調する人も減っている。

数少ない優良顧客はお寺だという。寺院などの天井や壁の修理も表具屋

さんの仕事だと聞き、ちょっと驚く。だが、お寺の経営も少しずつ厳しくなり、本堂の修繕や軸の修理なども経費削減のあおりで、その作業は減りつつある。表具の作業はかなりの根気・忍耐が必要であり、またその熟練の技は簡単に習得できるものではないが、このような状況下、後継者は非常に少ないのが現実だ。

むしろ外国人が表具に注目しており、その芸術性などに引かれて、習得を希望する人が日本を訪れているという。彼らがもしその技術を得られれば、国によっては帰国後により仕事が得られるというのだ。海外の博物館、美術館には多くの日本画、書画などが所蔵されているが、その修理ができる人材は極めて限られており、需要は大きいらしい。

それはまた、日本からの書画骨董品の流出が進んでいることを意味し

ているのではないかと、ふと思ってしまう。実際中国でも台湾でも、例えば茶道具など、特に骨董の部類が非常に珍重されており、それらを買いたい求めて自国で高く販売するといったケースをよく見かける。

茶道をしていたおばあちゃんが亡くなるまで、誰もやる人がおらず、その道具の価値も分からなくなり、いつの間にか流通していく。日本経済の低迷は、資産の海外流出につながっていく。

それなら日本人の人材が海外で活躍すればよいのでは、と思うのだが、そこは高齢化もあり、今となつては難しいという。若者がその技術を習得して、海外に出ていけば日本よりずっと高給が得られる仕事があると思うのだが、今からではもう遅いのだろうか。日本の伝統文化を残すといえ、日本国内だけを想定してい

る時代ではないように思う。

そういえばもう10年以上前、北京で郊外に別荘を買った北京の友人から、「いい庭師を紹介してほしい。この庭を日本庭園にして、ニシキゴイを飼いたい」と言われて驚いたことがあった。すし職人なども今や高給で海外に渡っている。日本の伝統的な技を守るのは、今は日本国内には限らず、むしろ海外に出た方が国際的にも評価される、と考えるのは間違いなのだろうか。

真のグローバル化とはどういう意味だろうか。一体どこに古き良き日本の技術に対するニーズがあるのか、もう一度よく確かめ、それに即した人材育成、海外派遣を検討する必要がある。もしやらなければ多くの分野で技術が失われていき、単純労働を嫌えば、若者の就業機会も奪われていくのではないか。



コラムニスト・アジアソウオッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。